

自閉症圏における否定と否認

氏名 郡司ペギオ幸夫

所属 神戸大学理学研究科地球惑星科学専攻

内海健〈2013, 筑摩書房〉によれば、自閉症者が世界を閉ざしているとき、世界は知覚される対象として理解されず、わたしと世界は渾然一体とした全体を成す。他者は、この全体を揺らすノイズとしてのみ理解される。これに対して、他者の声が初めて声として知覚される時、他者の声は、世界とわたしとの間に裂開を入れ、世界とわたしとの区別が生成される。

ところで、裂開は最初の一撃だけだろうか。酒木〈2001, PHP 新書〉は自閉症者のコミュニケーション能力を高める契機として、自身の身体性回復が重要だという。それは、おそらく身体が、わたしと世界の双対構造を、生成・解体の接続として持続させる、或る種の動的バッファーとして機能するからではなかろうか。身体は、他者＝外部性の拠代として、わたしと世界を媒介する。

ならば、わたしと世界の関係、すなわち、人の知覚・認知システムを、世界の否定を司る双対構造と、双対構造自体を否認する脳内他者の介入によって理解することができるのではなかろうか。このとき自閉症圏は、否認の程度の弱い形態として位置づけられる。第一に、否定を司る双対構造は、世界とそれを表象する空間との相互作用でモデル化される。最も簡単なモデルは以下のようなものだ。世界を普遍集合で表し、表象化を、表象集合への上への写像で表す。この写像から誘導される同値関係によって、普遍集合はタイプ（同値類）に分割される。タイプに対応する表象の要素は、タイプの名前となる。各タイプから普遍集合の要素を一つ選ぶ時、それはタイプの具体例、トークンとなり、タイプとトークンはもれなく一対一に対応する。このような世界の認知が自閉症圏の認知モデルとなる。

普遍集合と表象集合の双対構造を否認する脳内他者は、トークンの選択において、要素と同値類（集合）の混同が起こることで実装される。果たして脳内他者を備えた知覚・認知システムは、否定で結ばれた双対図式を絶えず解体し、宙吊りにするからこそ、原理的に不可能な世界（不変集合）とわたし（表象集合）の区別を実践することができる。厳格な区別を無効にし、間に身体を構成し、それによって世界とわたしの間を媒介しているかのように仮構するからこそ、我々は、局所的に、世界の分類（認知）を実践する。自閉症圏と健常者の相違は、双対構造の否認の程度に過ぎず、社会生活の改善を可能とする酒木の議論に整合的である。